

別れても我が逝く先きは他になし

祖師の御山の雪のふるさと

暑い、暑いという言葉を毎日繰り返してきた今年の夏も終わりで、セミの鳴く声からだんだん秋の虫に鳴く声も変わってきました。

仏教行事も、この間、お盆でお参りをしたと思ったら、早いもので季節も変わり、秋のお彼岸がまいります。墓地で、お仏壇で手を合わせ御先祖様にお参りすることが続きます。

こんな時ふと、人は死んでしまったらどこへ行ってしまふのだから、こんなことを考えることはありませんか。これは誰もが抱く素朴な疑問です。

私達は我が家というものがあり、外出しても戻ってくる家があります。それでは故人はどうなのでしょう。涅槃の道へ旅だったら行ったきりでもう戻ってこない、普通はこのように思うのが当然のことだと思います。

しかし熊沢禅師は、この句のように住み慣れた永平寺の山、言うならば我が家、愛すべき家族のいるところに戻りたい、または戻ってくるかと考えています。これは、祖師である道元禅師を慕う強い思いがあるからに他なりません。

しかし、この思いは何も熊沢禅師に限ったことではありません。皆さんの亡き故人の方々もそれぞれに戻るべきふるさとである家族の下へ、帰りたいと願っているはずで。その時は故人としてではなく、仏様として皆さんのそばに居ると言うことではないでしょうか。

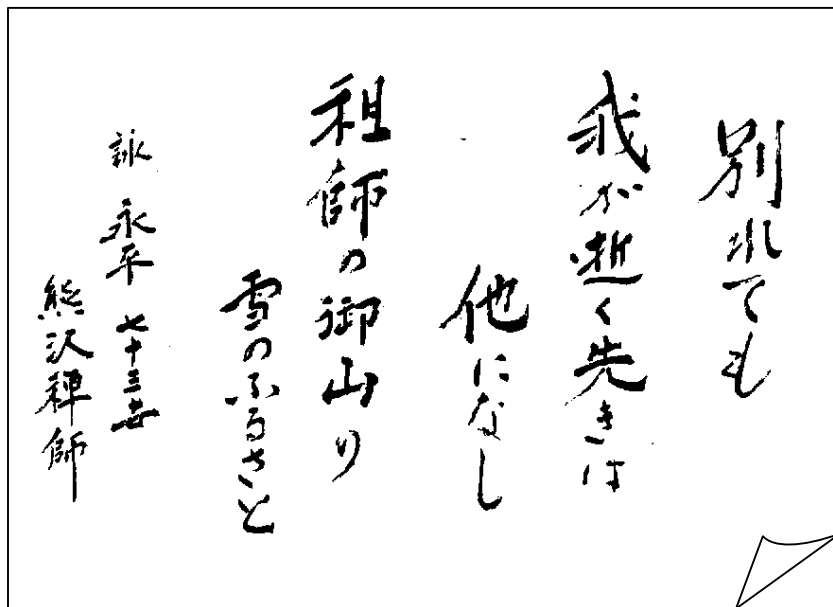
だから残された家族が悲しい思いをしていけば仏様も悲しい思いをし、皆が明るく仲良く楽しい一日を過ごしていれば安心される訳です。

このように考えますと、残された家族の皆様の日常生活がそのまま仏様を安心させる供養になる訳です。

これからも一日、一日を大事に仲良く過ごしましょう。

この詩を詠まれた熊沢泰禪師は、明治六年に愛知県に生まれ、各地で修行の後、曹洞宗大学林・京都浄土宗大学等で学ばれ、曹洞宗大学林の教授にられました。そして、永平寺の後堂・監院という重要な役職を務められ、昭和一九年に永平寺七十三世の貫首となり、その後二十五年間に亘り永平寺の発展と弟子の育成に務められたのです。

つまり「祖師のお山」とは長年住み慣れた永平寺であり、亡くなられた後も永平寺において、道元禪師の下で修行僧と共に修行に励みたいと願っていたのです。



曹 洞 宗

神奈川県第二宗務所
第五教区 布教部・出版部